

逞筆模試

■第八回

三月二日

解答難度指数 1.69

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。①～⑭は音読み、⑮～⑳は訓読みである。

(30)
1×30

- ① 柙蚕から取った糸を並べる。
- ② 一道の汽車、蒼靄を穿つ。
- ③ 胸中の恐懼と鬱快とを散じ去らん。
- ④ 喫了すれば即ち器皿を洗滌す。
- ⑤ 谷川は石に激して飛湍となる。
- ⑥ 若是皆修身を以て本と為す。
- ⑦ 跣跣脈脈として善く壁に縁る。
- ⑧ 稊稻必ず齊え、麩麩必ず時にす。
- ⑨ 千里を尺寸にして攢蹙累積す。
- ⑩ 肉一囊有りて鮓苔を裹む。
- ⑪ 夙夜淬礪以て聖慮に副い奉らん。
- ⑫ 弓繖を援きて之を射む。
- ⑬ 口に芻豢を銜みて其の味を知らず。
- ⑭ 巡礼する者への贖宥を宣言する。
- ⑮ 嘯聚附和以て蚩蚩の氓を惑わす。
- ⑯ 瑇瑁の櫛、花鳥の華鬘。
- ⑰ 臣の胸、樞質を当つるに足りず。
- ⑱ 冕冠に代わり立纏の冠が用いられた。
- ⑲ 情悃悃として帰らんことを思う。
- ⑳ 多宝塔めぐる勝鬘参りかな。
- ㉑ 秋蟬柳に噪ぎ、燕は楹を辞す。
- ㉒ 眉目秀麗、凜として狃るべからず。
- ㉓ 頼政がはね箸したり菰粽。
- ㉔ 俊を非り傑を疑う。
- ㉕ 唐銅の餌畚を秘蔵している。
- ㉖ 故旧遣れざれば則ち民偷からず。
- ㉗ 神の標野を犯す事を忌む
- ㉘ 香炉峰の雪は簾を擲げて看る。
- ㉙ 藤長けた顔には哀愁の翳りがあつた。
- ㉚ 炉端の燠搖きを手にする。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。㉑、㉒は国字で答えること。

(40)
2×20

- ① ウンチクを傾けて饒舌になる。
- ② 正犯をホウジョシした疑いがある。
- ③ イツボウの年に薨ぜられた。
- ④ 椎茸タボをした麗しき侍女。
- ⑤ 文化のランジュクは世の頹廢を醸す。
- ⑥ 芸者あがりのバクレン者。
- ⑦ 野道にアサミの花が咲いていた。
- ⑧ 先祖の墓にアカオケの水を掛ける。
- ⑨ 朝な夕なのソソる歩き。
- ⑩ 常磐の緑を誇るモミの林。
- ⑪ 開業祝いにシヨウ饅頭を寄贈した。
- ⑫ 世間の毀誉ホウヘンを顧みない。
- ⑬ メシビツから白い湯気が立つ。
- ⑭ タイシヤ色の瓦で屋根を葺く。
- ⑮ チンを飲みて渴を止む。
- ⑯ 床の間からチン潜りへ足を掛けた。
- ⑰ 正午に船をカイランし港外に出た。
- ⑱ カイランを既倒に反す。
- ⑲ 隣町のカザリ職を訪ねた。
- ⑳ 供花としてシキミを用いる。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。

(10)
2×5

- ① 罨のない懐中用の短剣。
- ② 美しき文才をいう。
- ③ 他人の手紙の敬称。
- ④ 久しく会わないこと。
- ⑤ 僧家の食事。

いりよ・しゅうちよう・そかつ
だうん・とえんさつ・ときひじ
ひしゅ・やこぜん

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。

(30)

問1
次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。

(20)
2×10

- | | | |
|--------|----|-----|
| (①) 啾啾 | 銘肌 | (⑥) |
| (②) 貴発 | 筆力 | (⑦) |
| (③) 響震 | 泉石 | (⑧) |
| (④) 勉行 | 得魚 | (⑨) |
| (⑤) 諫言 | 見賢 | (⑩) |

えいがい・きこく・こうこう
こうてい・こんち・しせい
せつかん・せんれん・ぼうせん
ること

問2

次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。

(10)
2×5

- ① 一度の失敗で過ぎた危惧をする。
- ② 艱苦を凌いで起業すること。
- ③ 大過は始めの小疵より生ず。
- ④ 隠れている人材を探し出し用いる。
- ⑤ 人は分に応じて満足するのが良い。

懲羹吹膾・偃鼠飲河・毫釐千里
爬羅剔抉・舐痔得車・六菖十菊
筆路藍縷・家鷄野鷲

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- | | | |
|------|-------|------|
| ① 天牛 | ⑥ 御薪 | (10) |
| ② 玫瑰 | ⑦ 黄爪菜 | 1×10 |
| ③ 襦袍 | ⑧ 野木瓜 | |
| ④ 満俺 | ⑨ 江浦草 | |
| ⑤ 金漆 | ⑩ 鼓子花 | |

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- | | | |
|-------|------|------|
| ① 知足 | ⑥ 剿説 | (20) |
| ② 達官 | ⑦ 疆土 | 2×10 |
| ③ 頌辞 | ⑧ 調馬 | |
| ④ 尊家 | ⑨ 枉駕 | |
| ⑤ 雀色時 | ⑩ 生得 | |

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分をも漢字で記せ。

- | | |
|----------------------------|------|
| ① フユウの一期。 | (20) |
| ② フケイ短しと雖も
之を続がば則ち憂えん。 | 2×10 |
| ③ 兜をイクビに着る。 | |
| ④ 落落としてシンセイの相望むが如し。 | |
| ⑤ チヨウキヨウ帰らんか、食うに魚なし。 | |
| ⑥ リユウジヨの才。 | |
| ⑦ 胸中正しければ、
即ちボウシ瞭らかなり。 | |
| ⑧ カタミの水。 | |
| ⑨ アジの一刀。 | |
| ⑩ 神竜のトウジヨウするは、
豈羈すべけんや。 | |

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがな)に注意して)ひらがなで記せ。

- | | |
|--------------|------|
| ア ① 鋤耨…② 耨る | (10) |
| イ ③ 肆筵…④ 肆ねる | 1×10 |
| ウ ⑤ 稀稠…⑥ 稠る | |
| エ ⑦ 祓禊…⑧ 祓う | |
| オ ⑨ 亟務…⑩ 亟やか | |

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

A 幸田露伴。眼を人心の靈絃に注ぎ、指を内奥の機微に染め、意を鍊り想いを凝らして、苟も紙に**ア**留まず。神来一味、興趣湧き来りて抑うべからざるの時、筆を下すこと**イ**ツシヤ千里、千言また方言、滔滔の勢遮るべからず。而して其の**2**ユウコンなるものは、捲雲翻濤、天馬空を行き、温藉なるものは、含英**3**シヨカ、春風天を掩う。露伴が巨盜堂明治の文壇を独歩するもの、また**イ**宜ならずや。

(佐藤儀助「文壇風聞記」より)

B 樗牛兄足下、足下曩に海外留学の名を受けて、文壇を退くや、評界頓に**ウ**岑寂を覚え、また精警斬峭の文字を見ること能わず。僕窃かに斯界の木鐸を失いたることを悲しみき。爾来十閱月、足下不幸にして病魔の冒すところなり、遂に留学の命を辞するの止むを得ざるに届かりしと聞く、足下の遺憾想うべきなり。

足下の才、足下の学、今に於いてすら既に評界の木鐸を以て許さる。親しく西欧碩学の間に交わりて、なお一層の**エ**鈍重を累ね、帰来かの**4**ランタイの筆を揮わしむ日には、我明治文壇の**5**ケイウンに貢献する所頗る大いなるべしとは、われ人共に期する所なりしも、二豎の禍するところ、また奈何ともするなし。(…中略…)現時の所謂批評家と称するもの、ただ罵詈雑言と嘲笑とを以て、人を是非することを知り、一も真摯**6**瑋瑋の論を立つるものなく、**オ**深遠なる哲学、科学に**カ**根柢を置き、明快に、且つ勁健に、万丈の光焰を放つて当世の文壇を論駁するもの、**キ**海に足下の如きはあらざるなり。今の時に当たつて、足下再び出でて評界に立つ、宛も大旱に**6**ウンガイを見るの概あり。足下が興望もまた大いならずや、足下乞う**ホ**勉めよ。

(高山樗牛「文芸評論」中内蝶「一・序より」)

C 彼は志を達せずして江戸に帰りぬ。然れどもその志は、死灰に帰する能わず。あたかも好し、安政元年正月十八日、前言の期を違えず、ペルリは軍艦四隻、汽船三隻を帥いて、江戸羽根田に**7**チンニユウし、また退いて神奈川に投錨す。識者の予測したる、愚者の夢視せざる、三百年來未だ曾てこれなき大刺激は来れり。大挑発は試みられたり。怯者懼れ、勇者奮い、愚者驚き、智者憂い、人心動乱、停止する所を知らず。この時において彼豈徒爾にして已まんや。蹈海の雄志は奔馬の鞭影に驚きたるが如し。彼豈徒爾にして已まんや。彼はこの志を**8**モタラし、暗にその兄に別を告げて曰く、今より風塵を鎌倉に避け、ただ読書を事とせんと。而してその兄に向つて誓文を与えて曰く、今**9**ク甲寅の歳より**ケ**壬戌の歳まで天下国家の事をいわず、蘇秦、張儀の術をなさず、退いては**9**トギヨと為り、進んで天下を**10**ハツシヨウし、形勢を熟覽し、以て他年報国の基を為さんのみ。富岳崩るといえども、刀水**コ**瀾るといえども、誓つてこの言に負かざるなり。

(徳富蘇峰「吉田松陰」より)